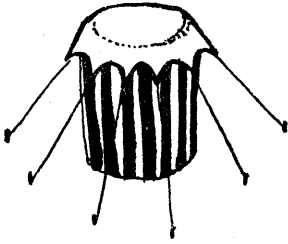


エリクソンと幼児教育 (9)



仁科 弥生

「エリクソンと幼児教育」という題名からいえば、彼の心理社会的発達段階についての考察の範囲は、前回の移動と性器期までということになる。そこで今回から、エリクソン理論のいくつかの重要な概念を取りあげて、それらと幼児教育との接点に焦点をしばって、話をすすめていこうと思う。

彼の理論の難解さやその概念のとらえにくさ、また多岐にわたる意味内容を包含する彼の用語の定義づけのむつかしさは多くの人がほぼ一致して認めるところである。たとえばラポポートも「精神分析的自我心理学の歴史の展望」(一九五九年)の中で、エリクソン理論は、臨牀的な精神分析の命題から、より一般的な精神分析的心理学の命題にわたっているが、その系統化が不十分であり、また、理論上の用語の概念上の位置づけも不明瞭である。理論の系統化と、用語の位置づけの明確化が今後の課題の一つであろうと指摘している。エリクソン自身も、『幼児期と社会』の初版のまえがき(一九五〇年)で、本書が概念的探求の道程であること、そして、その

第二版のまえがき（一九六三年）では、一人の研究者の遍歴の第一段階の記録であるために、理論の展開に不十分なところも多いことを認めている。そして事実、彼の諸概念は、その後の彼の精神分析家としての精力的な臨床経験と深い思索とによって一層、それらの意味内容が推蔽され、豊かにされていった。したがって、以下に述べることはある用語の概念のすべてを包括するものではなく、主に『幼児期と社会』『自我同一性』『洞察と責任』など一九五〇年代から六〇年代にかけて発表された彼の論著にもとづいたものであることをあらかじめ明記しておく必要があると思われる。

自我の概念について

先にふれたラバポートの論文を参考にして精神分析学における自我概念の変遷を辿ってみよう。

フロイトの初期の自我概念はまだ素朴なものであった。たとえば、彼は「自我」ego という言葉を、その時

その時で人格 person、自己 self、或は意識 conscious-ness などの同義語として用いていた。しかし彼が精神分析学において理論化しようと試みていたことは意識の心理学ではなくて無意識の心理学であった。そして心を無意識、前意識、意識の三つの精神的システムによって構成されているとする局所論を提出したことはよく知られている。この段階では、フロイトは、自我は常に意識されており、本人にとって不快な観念や情緒を抑圧するという前提に立っていた。しかし抑圧過程の分析によって、自我による抑圧の働きが患者には意識されない場合のあることが明らかになるにおよんで、自我 \parallel 意識 \parallel 抑圧するものという前提の修正が必要となった。そして「自我とエス」（一九二三年）において、彼は心はイド、自我、超自我という三つの体系から成り立つとする自我の構造理論を展開させた。「イド」の概念は、人間の感情、思考、行動をうながすすべての無意識的な衝動の根源をなし、生物学的、本能的なもので、その世界は無秩序で興奮に満ちているというものである。「超自我」は

いわゆる「良心」と呼ばれるものに相応する。それはイドからの本能的衝動に対して禁止と威嚇を行うが、その機能はほとんど無意識的であると考えられている。ここでの「自我」は、本来は、知覚意識系の周辺に組織づけられるが、同時に抵抗を引きおこす無意識的であるような構造を内包し、自分の自由になる中性エネルギーを所有し、本能的衝動のエネルギーを自我自身のエネルギーに変形することができると思定されている。そして自我の本質的な機能は人格の中の管理者として、イド、超自我、外界という三つの領域からの刺激を調整し、バランスをとる役割をもつと概念化されている。つまりイドからは直接的、即時的充足を求める本能的衝動の突き上げ、超自我からは道徳的、倫理的命令、そして外界からはさまざまな刺激や誘惑が子どもの心に集中する。そして幼い、まだ未熟な自我はこれらの圧力に翻弄され、まるで下僕のように働かねばならない。しかし自我も成長するにつれて、従順な下僕からやがて支配者になるというのである。

さらにフロイトは、そのためには、第一に身体的成熟、主として中枢神経組織の成熟と、第二に、外界対象とのさまざまな体験が必要であると考えた。そして、イドの世界を支配している機能様式を一次過程と呼び、イドから分化した自我の主たる機能様式を二次過程と呼んだ。一次過程が主に快樂原理に従うのに対して、二次過程は論理的法則に従い、言語によって表現され、現実原理に従うという。この二次過程の概念は本能的衝動から独立した自我の発生的根源を意味しているわけではなく、むしろ現実経験だけによって一次過程（つまり本能的衝動）に課せられるものとみなされているとはいえ、それは、後の現実との関係の概念を準備するという意味で重要であると、ラポポートは評価している。しかしフロイトによるこのような自我の概念づけには重大な欠点もあつたとラポポートは指摘している。すなわち、第一に、依然として自我は、イド、超自我、現実などの圧力の所産とみなされていること。第二に、ある種の独立した発生的な根が自我に帰せられているとはいえず、それは

イドから分化するものとみなされていること。つまり出生時は人間の心はイドのみから成り立っている。自我は本来イドの部分であって、成長する過程で分化してくと考えられている。第三に、自我を発生的に考察しているが、自我発達に関する漸成論的な概念づけは、リビドー発達の漸成論的な概念づけに比べて、まったく問題にされていないことなど。

しかし、このフロイトの自我の概念も、その後、彼自身の手によって修正された。「不安の問題」(一九二六年)の中で、フロイトは、自我がイドに全面的に従属しているという概念づけを否定した。自我は、自律的に不安信号によって防衛を発動させ、発達の過程が進むにつれて、受身的に経験した不安をしないで能動的な予期という形に転換させることができるようになり、自己自身の目標を追求する快樂原理を用い、自由に、思うままに使いこなす多様な防衛をもち、究極的には現実関係(つまり適応)に関心を向ける。その結果、本能的衝動によって促進される行動が現実の危険に直面しそうになる場

合には、自我は本能的衝動を抑制するとされる。この自我理論によって、フロイトは、現実と本能的衝動と自我の関係に統一的な解決を与えたのであった。そしてまた、現実の危険との関連の中でのみ、自我が機能するという形に制限されているが、ここで適応の概念づけがはじめて示唆されたのであった。

このように、フロイトは、二次過程という言葉で、そしてまた危険状況と関連づける形で、現実関係の最初の概念づけを示したが、それを適応という概念にまで一般化することはなかった。フロイトの歿後、その継承者たちの中で、ハルトマンやエリクソンが、精神分析以外の観察法や実験までもその研究方法に取り入れて、フロイトが提出したこの現実との関係、つまり適応の理論、とりわけ対人(心理・社会)関係理論の明確化に着手し、自我の自律的発達とその能動的な適応の機能に関する理論を発展させたと、ラバポートは概観している。

ハルトマンは、本能的衝動から独立した自我発達の生得的な発生という概念を理論づけているが、彼や彼の協

同研究者たちの理論についてのラポポートの解説を要約すると、次のようになる。

一、ハルトマンたちの概念では、自我はイドから発達するわけではなく、自我もイドも、ともに共通の母体から分化する。その母体は、胎児期以後の発達の最初期の未分化な段階にある。

二、ハルトマンは、自我発達の独立した根を、一次的自律性をもった自我装置とみなした（たとえば感覚、認知、運動の諸機能や特殊才能などを自我の生得的な発生基盤とみなしている）。そしてこの自我装置は発達の最初期の未分化な段階にすでに存在し、分化するにつれて、自我の主要な統制や執行の装置になると考えられている。

三、これらの装置は外的現実、すなわち「期待可能な平均的環境」と協調性をたもつための生得的な手段である。この協調を「適応状態」として概念づけている。つまり、この適応状態は、葛藤に先行するものであって、葛藤解決の所産ではない。したがって自我は現実経験に

よって本能的衝動から派生するものではないのである。

こうして、ハルトマンは、現実原理に従う自我の機能様式Ⅱ二次過程が相対的な自律性と適応性をもつことを概念的に明確にしたのである。

四、同時に、葛藤状態に由来する自我の構造と機能も衝動からの自律性を獲得しようという事実をも認めた。たとえば、排泄のしつけにおいて、最初は防衛としてはじまった幼児の心的過程はその目的が衛生上の習慣と規律正しさの維持に変わるとき、適応的自律性を獲得する。ハルトマンはこのように機能の変化という概念で自我の働きを説明し、これを自我の二次的自律性をもった装置と名づけた。

したがって、ハルトマンは、自我自体が発達の基礎をもつことを認め、受動的なものとしてとらえられていた自我に、現実との関係を調整する能動的な適応機能を認め、それらを理論化したといえよう。

では、エリクソンは、「自我」をどのようにとらえ、また自分の理論をフロイトにどのように関連づけている

のであるうか。

『幼児期と社会』の中で、「本書は自我が社会と結ぶ関係についての精神分析学の書である」とはつきり言及しているように、エリクソンの関心は、自我と現実との関係、ことに実際の社会的現実における自我の役割の理論化にあったことは明らかである。また、『自我同一性』の中で、フロイトの自我と社会との関係のとらえ方に言及して、エリクソン自身の自我理論の立脚点を明らかにしている。以下、エリクソンの言葉を引用しながら、そのおおよそを述べてみよう。

「フロイトの自我の概念は、当時もつともよく知られていた二つの対立者である生物学的なイドと社会学的な〈大衆〉 *masses* に関する既存の定義を用いて記述された。つまり、自我はその個人が経験を組織づけ理論的な計画を立てる中枢であり、原始的な本能の無秩序さと集団精神の無法さ双方からの危険にさらされていた。」したがって、初期のフロイトは、自己の内なるイドと自分の周りを取り囲む群衆との間で恐れおののく自我を想定し

たということもできるとエリクソンはいう。また、「群衆によって取り囲まれた人間の不確かな道徳性を説明するために、フロイトは、自我の内部理想や超自我を設定した。ここでもまた、はじめのうちは自我に押しつけられる外的な圧力が強調された。フロイトによれば、超自我は、自我が従わねばならないすべての拘束の内在化である。つまりそれは、両親の、後には教師たちの、さらには初期のフロイトにとって、〈環境〉や〈世論〉を構成する同時代の不特定の仲間の民衆であった人々の批判的影響によって、外部から子どもに強制されるもの」であった。

そしてこのような強力な非難に取り囲まれる結果、子どもの素朴な自分への愛情にみちた根源的な状態は傷つかざるを得なくなる。子どもは自分自身を評価するモデルを探し求め、そのモデルにあやかろうと努力することに幸せを見いだそうとする。子どもはこの試みに成功すれば自己評価を得ることになるが、すでにこの自己評価は、子どもが本来もっていた自己愛や万能感そのもので

はなくなっているとフロイトは考えたのであった。

これらのフロイトの諸概念は、臨床的な精神分析の方向や目標を決定しつづけたが、その後、変動する歴史的现实とともに、精神分析的諸概念も変遷する運命にあった。これについて、エリクソンは次のように述べている。「人間の動機を説明する分野で、同じ用語が半世紀以上にわたって使われてきたとすれば、それらはこの概念がつくられたその当時の時代のイデオロギーを反映するだけでなく、その後の社会変動に伴うイデオロギーの変遷も吸収せざるを得ない。それは人間の現実検討器官としての自我についてもいえることである。」そして、エリクソン自身、無組織な人間の集団の中の自我ではなくて、組織化された社会生活の中の幼児の自我の起源とその発達の研究に向ったのである。すなわち、社会組織がどのように、幼児の生存を保証し、特有なやり方でその欲求を管理し、固有な生活様式に幼児をとり込むのか、またそのために、社会組織はまず最初に一体何を幼児に許容するのかなどに注目した。そして、エディプス

仮説を導入せずに、社会組織が家族構造をどのように規定するかを説明することによって、人間の非合理的行動を説明することのできる図式を描こうとしたのであった。もっとも、この方向づけは、晩年のフロイトによっても示唆されていた事実には、エリクソンも言及している。すなわち「超自我の中に働いているのは、両親の個人的性質のものだけではなく、両親に決定的な影響を与えたものすべて、すなわち、彼らが生活している社会的階級の趣向や価値規準、彼らが人となった民族の特性や伝説などである。」と「精神分析学概説」(一九三九年)で述べている。

こうして、本考察の初回到心理社会的発達段階の解説の中で述べたように、エリクソンは自我の漸成論的発達を体系づけた。それは身体部位の器官様式と、その様式の漸成的発達という概念を導入し、人間の八つの発達段階に特有な発達課題の解決に社会が影響を与えるその主要なメカニズムを明確にすることによってであった。すなわち、ある段階につよく現われる器官様式(取り入

れ、保持、排出、侵入など）がその最初の器官や部位から別のところへ一般化し（置換えられ）、やがて本来の起源から切り離されて自律的なものになる、つまり、二次的自律性を獲得する過程を理論づけた。そして、それら器官様式がその社会の育児制度によって影響され、その社会に特有の行動様式（受けとる、与える、放す、作る）に機能変化して、二次的自律性をもつ自我の装置、すなわち個人の行動様式となることを明らかにしたのである。換言すれば成長する個体は、その所属する文化の特定の育児様式との出会いを通して、個体の生得的な接近の様式をその文化の社会的行動様式に適合するように変形させていくのである。このように、エリクソンは自我の発達を社会機構との関連を強調して漸成論的に体系づけたが、その自我の二次的自律性の考え方は「機能の変化」というハルトマンの概念の特殊例であると、ラポートは位置づけている。

次に、エリクソンは「自我」の機能をどのように定義づけているのであろうか。

『幼児期と社会』の中で、彼は「自我」という言葉を精神分析学上の起源に関連させてその定義づけを試みている。要約すると、おおよそ次の通りである。

精神分析学では人間が抱く過度の願望の圧力にイドという名称を与え、良心が加える過酷な力に超自我という名称を与えている。フロイトによれば、イドはわれわれを「動物に過ぎないもの」にするすべてのものを指していた。またそれは、半人半馬の怪物、ケンタウロスが馬身に束縛されているように、自我もこの非人間的で、獸的な層に拘束されていると感ずるといふフロイトの仮説を示すものであった。ただ、ケンタウロスは自己の馬身ができるだけ有利に利用するが、自我はこのイドとの結びつきを危険と考え、重荷に感ずるのである。

心のもう一つの構成要素としてフロイトが認知した超自我は、良心の要請をイドに抵抗させて、イドの表現を制限する一種の自動調整機能と考えることができる。ここでもはじめは、超自我によって自我が負わされる異質の重荷が強調された。なぜなら、自我の一段上位にある

超自我は「自我が屈服しなければならぬすべての制限の内在化された総計である」と考えられていたからである。たしかに、われわれが自責や憂うつの念にかられているとき、超自我は自我に対して非常に古風で野蛮な方法を用いるために、それらは盲目的で衝動的なイドの手段と類似したものになることがあるからである。

しかしながら、エリクソンも指摘しているように、このイドと超自我という二つの力のどちらかに個人が支配された場合の二つの極端な状態の中間にある比較的均衡のとれた状態については、精神病理学として発達した精神分析学はあまり知見をもっていなかったのである。そしてエリクソン自身は、この「中間的狀態」をいわば演出する自我の機能に注目し、その解明に論議を集中させたのであった。

エリクソンにとって自我とは次のようにとらえられている。

自我は、イドと超自我との間にあって、たえずこの両者の極端なやり方を調整し、平衡を保たせ、或はそれら

を受流しながら、歴史的連続性の中に存在する日々の現実に調子を合せ、知覚を検査し、記憶を選択し、行動を支配する。その他にも、各個人が自分の立場を見定め、計画を立てる能力を統合する役割も果たすのである。また、自我はそれ自身を守るために「防衛機制」を用いる。これは本人には無意識の機制である。そして個人が欲求の充足を延期したり、代償を見いだしたり、或はイドの衝動と超自我の強制との間に妥協をもたらすことを可能にする。そのような防衛機制の一例として、怯えるといつも攻撃的態度に出たり、狼狽させられることを恐れて知ることを避けたいような情報に対して、不安にかけられながらもかえって執拗に質問を浴びせかけた三歳のサムは「対向恐怖症的」防衛をあげている。しかし、エリクソンは防衛機制は自我の一つの防衛的側面にすぎないと考えている。したがって、自我とは経験をまとめ、突然おそう衝動と過酷な良心の必要以上の圧力の両方からこのまとまりを守る内的な心的統制であるといえる。それは自分の内面的生活と社会生活の二つの面を一つに

結びつける内的器官として概念化されている。

このエリクソンの自我の概念をより具体的に理解するために、幼児期における自我の破壊の事例としてエリクソンがあげたジーンの場合を次に紹介しておこう。

ジーンは堅さと唐突さがきわだつ華奢な六歳の少女である。彼女ははじめて治療者（エリクソン）を訪問したとき、その家中の部屋を次から次へと走り抜け、ベッドがあるところからめくって枕を探した。枕を見つけると、それを抱きしめ、小声で話しかけ、空ろな声で笑った。彼女は「分裂病患者」であった。

ジーンの知覚の認識が極端に乱れはじめたのは、実は母親が肺結核を患って病床に就いたからのものであった。母親は自宅で療養することを許されていたが、この娘は乳母に抱かれて、病室の入口から母親に話しかけることができるだけであった。この期間中、母親は娘の何か自分に訴えたい様子を感じとっていたが、どうすることもできないでいたという。そして自分が発病する少し前に、ジーンの最初の乳母に暇をやったことを後悔し

た。新しい乳母は気だてのよい女ではあったが、頑固で、しかも精力的で、いつもあわただしく赤坊をあちこちと動かしていた。それを母親は病床からはらはらしながら見守るだけであった。またこの乳母は、子どもに注意を与えるときは、たいそう大仰であった。きれいな好きで、子どもが床の上をはい回ることを許さず、もし手足が少しでも汚れようものなら、まるで船の甲板を磨くように、子どもをごしごと洗った。

四ヶ月間、母親から分離された後、ジーンは再び母親の部屋に入ることを許された。そのとき、彼女は生後一年一ヶ月になっていた。彼女は小声で囁くように口をきくだけであった。ボールが床の上をころがるのを見ておびえ、紙がバリバリ音を立てるのにおののいた。しだいにこの恐怖は他の対象へも広がり、灰皿やよごれたものにはけっしてさわらうとせず、やがて周囲の人にさわったり、さわられたりすることを避けるようになった。

したがって、この子どもの枕への愛着は、彼女が母親の病床へ近づくことを禁止されていたあの時期と関係が

あると思われた。そしてすべての人との接触から逃避するという様式で、彼女はこの事態に「適応した」のである。母親に対する愛情を枕に対する愛着という形で表現していたと考えられた。

このような子どもは、自分の感覚器官や生活機能を敵視し、「外部のもの」として拒絶する。彼らは意識界に押し入ってくる不穏な衝動や、圧倒的な感動を制することができない。そこで、それらを自己の内部への侵入者とみなしたり、自分の外界との接触や意志の伝達のための諸器官を敵視したりする。このような場合、母親が適切に、しかも一貫した態度で子どもを勇気づけることによってのみ、子どもの自我は自分の諸器官を統御できるようになり、またそれら器官で社会的環境を知覚し、信頼をもって社会的現実と交わっていくことができるようになるのである。実はジーンはそれまで両親と離れて、専門の看護人の世話を受けていた。そこで治療者の提案によって、ジーンは家族と一諸に住み、母親が彼女の世話をし、治療者がその家庭を定期的に訪問して指導する

ことになった。

ジーンは母親の世話に気づき、親密な接触を取りもどそうと試みるようになった。しかし、その関心の示し方や、選ぶ対象はやはり唐突であった。彼女が示した最大の関心の的は母親の乳房であった。彼女は母親の膝に座って乳房や乳首をいたずらっぽく指で突いた。そして読経口調で歌をうたった。その歌は、母親の胸の包帯（ブラジャー）にさわると母親が痛いおもいをするという考えに彼女がとらわれていることを示していた。しかもその歌の言い回しの絶望的な激しさから、母親が「胸の病氣」になったのは自分が痛くしたからで、母親は傷ついた印として「包帯」を胸に巻いており、それが理由で自分は母親の部屋から締め出されたという考えを伝えているようであった。そしてだいに自己懲罰的になり、自分の「指を切り捨てる」よう要求するようになった。母親は、自分の病氣はジーンのせいではなかったことを根気よくジーンに説明した。そして万時に世話や配慮をくばった。ジーンは母親を信頼しはじめ、著しい回復を示

した。七歳になるころには、自分の指が取り返しつかないような害を与えるはずはないと感じはじめ、さらに、ものを習ったり、美しいものを作ったりするために指を使うことができる感覚ははじめた。そして、指の遊びに夢中になった。それは「この小豚さんは買物に行く」「あの小豚さんはエスカレーターに乗る」など、小豚たちに彼女が日頃していることをやらせることであった。こうして彼女は自分の指を引合いにして、時間を統合することを学び、また違った時間にいろいろ異なったことをしてきたさまざまな自己の連続性を確立することを学んだ。これは、ジーンの自我が、ある出来事が起きたとき、その起きたことの確実性が十分に与えられなかったというそれだけの理由で、それを試すことを繰返すことよって、経験を統合しようとする必要に支配されることを物語っている。したがって、ジーンは、自分の指を使って、意志の伝達と共に、そのような経験の再統合を成しとげたのであった。

以上のように、ジーンのエピソードには、幼い、弱い

自我が自己の統一を求めて苦闘する姿が描かれているが、自我とは「人間の経験や活動を環境に適應する行動に統合する能力」を意味する概念であるとまとめることができよう。それは個人の内部の秩序を守るために発達した「内面的機構」であり、「その人個人」ではなく、またその人の個性でもない。もっともその個性にとつて欠くことのできないものではあるが。

つて、フロイトは夢の研究が大人の無意識への王道であると言った。エリクソンは子どもの自我を理解するための最善の手がかりは、子どもの遊びの研究であると述べている。今回は「遊び」を中心に話をすすめよう。

(津田塾大学)

☆

☆